

# インタビュー 吉田憲司 新館長に聞く 開館40年、 これからの みんなく

この4月より、吉田憲司教授が6代目館長に就任しました。館内からの就任は、3代目館長の石毛直道名誉教授以来、14年ぶりとなります。吉田先生のこれまでの歩みや、今年で開館40周年を迎えるみんなくの今後の展望などをうかがいました。

(聞き手=丹羽典生  
本誌編集長・超域フィールド科学研究部)



喪明けの儀礼ボナで、森から村に向かうかぶりもの型の仮面「ニャウ・ヨレンバ」カリザ村、ザンビア。2000年撮影



吉田 憲司

経歴(※は受賞歴)

- 一九八〇年 京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒
- 一九八七年 大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得満期退学
- 大阪大学文学部助手
- 一九八八年 国立民族学博物館助手
- 一九八九年 学術博士(大阪大学大学院文学研究科)
- 〔学位論文〕「チユワ社会における仮面と変身信仰の研究」
- 一九九二年 国立民族学博物館助教授
- 一九九三年 第五回日本アフリカ学会奨励賞受賞(※)
- 二〇〇〇年 国立民族学博物館教授、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任
- 第二二回サントリー学芸賞受賞(芸術・文学部門)(※)
- 二〇〇四年 第一回木村重信民族芸術学会賞受賞(※)
- 二〇〇六年 国立民族学博物館文化資源研究センター教授・同センター長
- 二〇一五年 国立民族学博物館副館長
- 二〇一七年 国立民族学博物館館長

主要著書

- 一九九二年 『仮面の森——アフリカチユワ社会における仮面結社「憑霊」邪術』講談社
- 一九九九年 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店(二〇一四年再版)
- 二〇一三年 『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージアムの試み』岩波書店
- 二〇一四年 『宗教の起源を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』岩波書店
- 二〇一六年 『仮面の世界をさぐる——アフリカとミュージアムの往還』臨川書店

## 二足のわらじをはいて

大学時代は文学部哲学科に在籍されていましたが、当時から文化人類学・民族学への関心はあったのでしょうか。

吉田 京都大学に入学した当初から関心はありました。しかし、当時、京大には文化人類学を専攻できる講座がなかった。人類学を学びたい者の多くは社会学の講座に進みましたが、わたし自身はもともとモノや芸術に関心があったので、美学美術史学の講座を選びました。教授の吉岡健二郎先生はカントやフィードラーの、助教の清水善三先生は平安彫刻史の専門家で、その講座自体に人類学との接点はありませんでした。

ですから、文化人類学は、正規の講義ではなく、半ば独学で学んだようなところがあります。梅棹忠夫さんがみんぱくに移られたあと、米山俊直さん(京都大学・当時)が面倒をみておられた、近衛口ンドという毎週水曜日の自主サークルや、谷泰さんが主宰しておられた京都大学人文科学研究所の社会人類学の共同研究に参加して、人類学の知識を吸収していきました。

フィールドワークに関しては、大学に入ったあと、すぐに探検部に入部して、見よう見まねで山村調査を始めました。はじめての調査地を選んでのが、長野県下伊那郡の遠山郷下栗です。霜月神楽という仮面の芸能を伝えている、南アルプスを望む山上の村です。この下栗には、昨年、四

〇年ぶりに足を運びました。

アフリカへの関心も、このころからあったのでしょうか。

吉田 海外へのあこがれはすでにありました。探検部のプロジェクトとして、インドから喜望峯まで自動車で踏破するという計画を立てたのですが、先輩のところに相談に行くなかで、福井勝義さん(民博・当時)に相談したところ、「君たちはアホですか？ 車で走るだけで何になる！」と言われ



パリの男たちによる大巻狩の朝。朝日に槍の穂先が光る。ラフォン、南部スーダン、1979年撮影

てしまいました。「それよりも、一九七二年に第一次内戦が終わったスーダン南部に行かないか」と福井さんから誘われ、即座に「行きます」と答えましたが、アフリカとのつながりのぎっかけです。一九七八から七九年にかけて、休学し、今から思えば大時代的な「上ナイル踏査隊」という名の隊を組織して、スーダン南部に行きました。このとき、行をともしたのが、栗本英世さん(現・大阪大学)と重田眞義さん(現・京都大学)です。半農半牧の生業を営むバリという集団の村に滞在したあと、仮面をもっているコミュニティに入るともりだったのですが、途中でマラリアにかかってしまい、結局自分が行きたかったフィールドでは調査ができず、帰国の日を迎えました。アフリカでの仮面の調査は懸案となっていました。復学しましたが、そのまま京大の美学美術史学の講座でアフリカの仮面の研究を続けるのは難しいと判断し、京大を離れることにしました。

大学院は大阪大学へ進学されたんですね。

吉田 そうです。当時、日本で唯一、先史美術や現代美術といった、いわゆる美術史学に収まらない分野の芸術現象の研究をしておられた木村重信先生の門をたたいたのです。所属は西洋美術史講座ですが、そこでわたしはアフリカの仮面の造形や儀礼についての研究に取り組みました。大学院博士課程のときには、仮面結社をもつザンビアのチエワの人びとの村で二年間のフィールドワー

クに従事しました。一年以上、辛抱強く待ち続け  
たすえに、ニヤウとよばれる仮面結社のメンバー  
になることを許され、以来、結社の内側から仮面  
の世界をみる事ができるようになりました。チェ  
ワの人びととの付き合いは、今も続いています。

大阪大学では、そのまま西洋美術史の講座  
におられたのですか。

吉田 助手を終えるまで、西洋美術史の研究室に  
所属していました。ですから、最初からずっと二  
足のわらじをはいていたことになりす。長いあ



村入りから1年以上、村人から借りた畑を耕すだけの日々が続いた。  
カリザ村、ザンビア。1984年撮影

ルバイトでその準備の手伝いのために開館直前の  
みんなに通って来ていました。また、一九八三  
年より始まった文明学部門の最終回である、「近  
代世界における日本文明——収集と表象」(第一  
七回、一九九八年)では、奇しくもわたしは主宰の  
任をつとめました。何か、深いご縁を感じます。  
さらにさかのぼると、七〇年の万博のときには、  
お祭り広場でおこなわれた日本中のボーイスカウ  
トによる手旗信号ショーに出演しました。中学三  
年生だったわたしは、ボーイスカウトに入ってい  
たのです。そのときは、まさか将来、万博の跡地  
で働くとは思っていませんでした。

大学や研究機関における人文社会科学のあ  
り方が、国内外で問われている印象があり  
ます。研究機関としてのみんなの展望は  
いかがでしょうか。

吉田 みんなは、いろんな世界一をもっている  
と思うのです。世界第一級の規模の博物館と大学  
共同利用機能をもつ文化人類学・民族学の研究所  
として、世界で唯一の存在です。みんなは今や  
三四万点という標本資料のコレクションをもって  
いますが、このコレクションは、二〇世紀後半以  
降に築かれた民族誌資料(標本資料)のコレクショ  
ンでは世界最大規模のもので。国内では、世界  
全体をカバーできる研究組織、研究者の陣容を  
もっている唯一の研究機関です。こうした「オン  
リーワン性」を、今まで以上に、最大限に發揮し、

いだ、人類学と美術史学、  
民族学博物館と美術館の  
あいだにはまったく交渉  
がなく、壁で隔てられて  
きたというようなところ  
があります。わたし自  
身はいつもその両方を横  
断するかたちで研究を進  
めてきました。

一九八八年にみんなく  
に着任してからも、そ  
のような視点や問題意  
識に基づいた展覧会を  
企画されました。

吉田 はじめて企画したのは、一九九〇年の「赤  
道アフリカの仮面——秘められた森の精霊たち」  
でした。そのあと、「異文化へのまなざし——大  
英博物館コレクションにさぐる」(一九九七年)、「ア  
ジアとヨーロッパの肖像」(二〇〇八年)、そして「イ  
メージの力——国立民族学博物館コレクションに  
さぐる」(二〇一四年)など、美術館と博物館にお  
ける文化表象のあり方や、そこに潜むまなざしを  
さぐるような一連の展示を企画しました。美術史  
学と人類学、美術館と博物館。わたし自身の仕事  
は、一貫して、そのあいだに築かれた壁を乗り越  
える作業であったように思います。

活性化させていきたいと思っています。そうすれ  
ば、今の人文系に対する圧力などはそれほど気に  
することはないだろうと思っています。国の意向  
がどうであれ、分野を問わず、日本の研究者や組  
織が海外へ出ていく際には、異文化理解や世界に  
対する認識がいちばんベースになるでしょうから。  
しかし、世界一といえながら、情報発信の面では、  
これまでのところ不十分な面もみられます。人類  
の文化遺産、文化資源とその情報の世界的な集積  
拠点として、国際的にもっと発信していく責任が  
あるでしょう。データベースの英語化、現地語表  
記も含めた複数言語化は、まっさきにとりかから  
なければならぬ課題です。



上：特別展「異文化へのまなざし——大英博物館コレクションにさぐる」。100年前の大  
英博物館の民族誌ギャラリーを再現した。1997年。撮影・千里文化財団  
下：「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」の展示風景。国立新美  
術館にて、2014年

### より開かれたみんなく

先生のみんなくのかかわりについてお聞  
かせください。

吉田 みんなくとは、開館前からのつきあいがあ  
ります。かつて、谷口財団の支援による国際シン  
ポジウムがさまざまな学問分野で開催され、その  
うちの民族学部門と文明学部門がみんなくでおこ  
なわれていました。一九七七年九月、民族学部門  
の第一回「東アフリカ牧畜民のあいだの部族間関  
係——戦争と平和」が開催されました。福井勝義  
さんが主宰され、京大の学生だったわたしは、ア

これからのみんなくの展示のありかたはど  
うなるようになっていくのでしょうか。

吉田 わたしはみんなくの創設二〇周年記念シン  
ポジウム「二世紀の民族学と博物館——異文化  
をいかに提示するか」(二〇〇四年)で、コーディネ  
ーターをつとめました。その場で美術史家のダンカ  
ン・キャメロンが提唱した「フォーラムとしての  
ミュージアム」という考え方を紹介しました。  
「フォーラムとしてのミュージアム」というのは、  
そこで人と人、人とモノが出会い、そこから議論  
や活動が広がっていく場としての博物館という考  
え方です。その理念は、みんなくの本館展示のリ  
ニューアルのもととなった「展示基本構想二〇〇  
七」にも盛り込まれましたし、世界的な博物館の  
潮流にもなってきたと思います。

ただ、この考え方は、人類学にも当てはまるこ  
とだと思っています。われわれ人類学者が人びとから  
情報をもらって、それをもとに文化を語るという  
作業をしている以上、そもそも人類学の営み自体  
がフォーラムでなければなりません。ですから、  
「フォーラム」というのは、博物館のあり方と  
同時に、人類学の研究のあり方についてのひとつ  
のビジョンになるだろうと思っています。今みん  
なくが進めている「フォーラム型情報ミュージア  
ム」のプロジェクトも、その考え方の延長線上に  
あります。それは、たんなる博物館の情報発信の  
強化ではなく、みんなくのもつ資料情報を、国内  
外の研究者をはじめ、その「資料」をもとと作り、



丹羽典生編集長(左)と吉田憲司館長。撮影・千里文化財団



との思いに変化が起き始めているようです。しばらくは、この集団のアイデンティティの変化のプロセスを追いかけていきたいと思っています。

南部アフリカの聖霊教会の聖霊憑依や病氣治しの儀礼についても、三年前、本にまとめた以降の展開を追いかけていきたいと思っています。その英語版の出版もひかえています。

また、みんぱくが収蔵している仮面資料についても、内外から展示会や貸出などの需要が頻繁にありますので、一冊の本にまとめるなど、わたしが退職するまでに整理しておきたいと考えています。

みんぱくは今年四〇周年という節目を迎えます。関連する催しについて教えてください。

吉田 一九七七年一月一七日に開館しましたので、それに近い一月一日に関係者の方がたに集まっていたらいい、開館四〇周年記念式典をおこないます。その場を展示場のお披露目、生まれ変わったみんぱくをみなさんにあらためて見ていただくような機会にしたいと思っています。また特別展「ビーズ」を皮切りに、さまざまな特別展や企画展も予定しています。二〇一八年三月には、太陽の塔の改修工事が終わりますので、万博と民博をつなぐような特別展を実施する予定です。

最後に、吉田先生にとって、みんぱくとはどのような場所なのでしょう。



我が家の前で、アシスタントのヨセフ・ビリと。カリザ村、ザンビア。2011年撮影

吉田 わたしにとって、みんぱくは何よりもまず夢が実現できる場所でした。展示会や共同研究国際シンポジウムなど、やりたいことはすべて実現させてもらったという思いがあります。その思いは、今もむかしも変わりません。これからのみんぱくも、誰にとっても、夢が実現できる場所であってほしい。そして、そういう場にしたいと思います。

それから、もうひとつ。わたしにとって、みんぱくは、やはりフォーラムとしてのミュージアム、フォーラムとしての研究活動の実現の場、といえると思います。観覧者や利用者も含めて、人びとがここで出会い、そこからあらたなものを生み出していける場、そのような場としてのみんぱくを皆さんとともに作っていきたくと思っています。

## 国立民族学博物館 開館四〇周年記念事業

展示

小・中学生の本館展示・特別展示の  
観覧無料化

2017年4月1日「土」

特別展

「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」

2017年3月9日「木」～6月6日「火」

特別展

「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」

2017年8月10日「木」～10月10日「火」

企画展

「カナダ先住民の文化の力

——過去、現在、未来」

2017年9月7日「木」～12月5日「火」

開館四〇周年記念特別展（企画立案中）

2018年3月～予定

刊行物

「国立民族学博物館展示案内」

2017年10月末発行予定

国立民族学博物館友の会

「みんぱく大集合」

2017年11月4日「土」

Q 子どものころの夢は？

原子力船を作りたい

当時、原子力船は夢の技術でした。その後、建築の歴史に興味をもつようになり、大学では、工学部建築科を志望していましたが、入試で失敗しました。翌年、柳田国男の全集に出会ったのをきっかけに、進路を文学部に変えました。

Q 好きな芸術作品は？

渡岸寺の十一面観音立像  
(滋賀県長浜市)

仏像が仮面研究の原点かもしれない。仏像への興味から出発して、徐々に静的にたえずむ造形よりも、人間の身体に装着してダイナミックに躍動する仮面という造形に魅力を感じるようになったように思います。

Q 好きな映画は？

『スターウォーズ』

第一作（エピソード4）は映画館でだけでも四回くらい見ました。『スターウォーズ』は人間にとつての異界をあらわしていて、自分の研究対象や関心にもつながっているようです。



## 新館長の 横顔

吉田先生の意外な二面に迫ります。

(聞き手 山中由里子)

本誌編集委員・学術資源研究開発センター



Q コスプレをするとしたら？

月光仮面

子どものころの自分なら、ヒーローもの、特に月光仮面になりたいと言っていたのではないでしょう。現在の仮面研究にもつながっているのかも。

Q 対談してみたい  
歴史上の人物は？

司馬遼太郎と上杉謙信

司馬遼太郎と対談してみたいというのは、彼の文明観を聞いてみたかったからです。また、わたしは歴史小説が好きで、海音寺潮五郎作の『天と地と』にのめりこんだ時期があり、越後の各地も歩き回りました。会えるというなら上杉謙信という人物には、会ってみたいと思います。

Q 生まれ変わるとしたら？

霊長類学の研究者か犬

霊長類学には今でも関心があります。もうひとつ、長年犬と一緒に暮らしてきたので、普段犬が何を考えているのか体験してみたいという気持ちもあります。